《書評》

# 『質的研究法マッピング：特徴をつかみ、活用するために』

## サトウタツヤ*・春日秀朗**・神崎真実***編、新曜社、2019 年

滑　田　明　暢†

本書は、代表的な 26 の質的研究法を「構造－過程」および「実存性－理念性」の両軸によって整理し、それぞれの研究法の解説を示したものである。それぞれの質的研究法は「モデル構成（過程×実存性）」「記述のコード化（構造×実存性）」「理論構築（構造×理念性）」「記述の意味づけ（過程×理念性）」の 4 象限マトリクスのうちのいずれかに布置されて整理（マッピング）されており、読者はそのマッピングからそれぞれの研究法の特徴を概観できるようになっている。また、それぞれの研究法の解説に加えて、フィールドエントリー、インタビュー、観察、質的研究の倫理といった質的研究を進めるうえでの方法論的基礎や、混合研究法、アクションリサーチ、ナラティブに基づく医療（NBM）、学習論の見取り図とその未来、合議制質的研究法といった今後の質的研究の広がりと可能性を描いた章も配置されている。これらの章を読むことにより、読者は質的研究をより大きな視野で俯瞰することができると同時に、それぞれの質的研究法が今後どのような文脈で活用されていくのか、研究法自体どのように発展していくのかについての示唆も得ることができる。

私たちが、質的研究法を概観しながらそれぞれの研究法の特徴を知ろうとする（つまり本書を手に取って読む）時機は、主に 2 つあるように考えられる。一つめの時機は、これから研究を始めようとするときである。質的研究法を初めて用いる場合でも、すでに何らかの質的研究を実施した経験があった場合でも、研究の問いが浮かんだときに、どのような研究法を用いるか（問いに対する答えはどのようなものか、問いに対する答えをどのように導くか）を考えることは研究を実施する誰もが行うと考えられる。そのときに、モデル構成をしたいのか理論構築を行いたいのか、記述のコード化を行いたいのか意味づけを行いたいのかといったことを、本書を用いながら考えることができる。

二つめの時機は、研究を実施している途中あるいは研究をある程度実施して研究成果をまとめようとするときである。すでに何らかの研究法を用いて研究を進めていて、その成果をまとめる際には、実施してきた研究の特長がどこにあるのかを考えることになる。そのとき、自分たちが実施してきた研究は何を明らかにしてきたのか、どのような結果を得るものであったのかを、本書を読み

* 立命館大学総合心理学部教授
** 福島県立医科大学医学部衛生学・予防医学講座助教
*** 立命館大学立命館グローバル・イノベーション研究機構専門研究員

† 静岡大学大学教育センター講師
nameda.akinobu@shizuoka.ac.jp

© 立命館大学アジア・日本研究所
『立命館アジア・日本研究学術年報』2020, PRINT ISSN 2435-421X ONLINE ISSN 2435-4228, Vol.1, pp.103-105.

ながら考えることができる。

本書を手に取り、評者もこれまでの自分自身の研究を振り返ってみた。評者自身は研究において、夫婦の生活家事（稼得、家事、育児、介護等を含めた生活に必要な仕事）分担の維持と変化の過程とそれにともなう公平感情を理解しようと試みてきた。質問紙調査とインタビュー調査の両方を行ってきており、質問紙調査の自由記述やインタビュー調査の語りをもとに考えることが多い。特に、本書でも描かれている KJ 法を用いて考えることが多い。KJ 法を用いる際は、調査から得られた分析の対象となる情報すべてに目を通し、それぞれの情報の切片が何を言わんとしているのかを考える。そのため、自分自身が向き合っている情報の全体像を知ることができると同時に、それぞれの情報に対しても理解が深まる。それぞれの情報の切片をまとめていく作業はとても苦しいが、その作業を進めていく中で、作業をする前には見えていなかった視点に出会うことがあるため、知見の創出に寄与する見方や考え方を見過ごさないようにするためにも、重要な作業であると感じている。

一方で、各まとまりの関連を示した全体図を用いて結果を示していると、一つ一つの具体的な切片や事例への考察が少なくなってしまうことを感じる。どのようなまとまりが得られたか、それぞれのまとまりにどのような関連が見られたかを伝えることに焦点を当ててしまうのである。そうなると、各切片や事例の詳細を示すことができない。個別の切片や事例への理解を補うためには、具体的な切片や事例を示しながら伝えるといったような表現の工夫が必要となる。場合によっては、別の研究法によって一つの切片や事例を詳細に読み解き意味づける作業や研究を行うことが、新しい知見を得るうえで有用かもしれない。本書のマッピングには、「構造－過程」と「実存性－理念性」の他に、「個性記述的－法則定立的」と「公共性－事例性」の軸も配置されている。KJ 法は、「公共性－事例性」の軸においては公共性の範囲内に布置されている。KJ 法における図解化は、文脈から切り離され切片化された情報に共通する視点や考え方のまとまりを見出し、それらの関係図を示すことによって、複雑な諸現象を理解可能な形にするとともに見えていなかった発想を得るものであると考えれば、それが公共性への布置の所以であると評者の経験からは考えられた。

また、本書のマッピングの「構造－過程」の軸においては、KJ 法は構造の範囲内に布置されている。その一方で、本書ではすでに述べられている通りだが（4 頁）、KJ 法で示された結果から、研究の対象となる経験の過程を読み取ることもできる。ただし、KJ 法の結果において示された過程を一個人がすべて経験していたかどうかは、KJ 法によって得られたまとまりの図解化からだけでは知ることはできない。個別の事例に立ち戻って過程に関わる記述を詳細に検討する、あるいは他の研究法を用いて別途検討することも、経験の過程をより詳細に理解するためには有効であると考えられる。

自分自身の研究活動を振り返ったあとに本書に立ち戻ってみると、本書のマッピングは、質的研究法を用いた私たちの研究活動を理解する軸を与えてくれているように考えられる。本書を読んでこれまでの研究活動を振り返ることで、自分が実施してきた研究ではどこに重きが置かれてきたのか、これまでに実施してきた研究は何をどのように明らかにしてきたのかを考察する。そして、これまでに重点が置かれていなかった部分にも意識が向き、もし必要なら、新しい研究方法を用いて現象や経験をさらに精緻に理解したいという思いが込み上げてくる。本書は、そんな機会や気持ちを後押ししてくれる書である。

もちろん、これから研究を始める、という方にも、自分は研究を通して何がしたいのかについて

指針を与えてくれるものであるだろう。本書のマッピングでは多くの質的研究法が整理されて示されているため、気になった研究法を見つけたときにその解説を読み、そこからさらに関わりを深めていく機会を提供してくれる書でもある。

自分自身が用いてきた研究法の特徴と位置づけを再帰的に考え、さらにはそれぞれの研究法についてより詳細な情報を得るきっかけとして活用したい書である。その活用をすることはおそらく、これから実施する研究の具体像あるいはこれまでに実施してきた研究の結果から学べるものは何か、をより精緻に考えることにつながるだろう。